

Challenge!

ゾウのエサやり体験スポット ゾウと はなスポット

魅せる

飼育展示担当 西方 理

昨年8月から運用開始した「ゾウとはなスポット」は、いつでもお客さまがゾウにエサやりができ大変好評です。

2012年4月からゾウ室内展示場へお客さまに入ってもらい、飼育員立ち会いのもと時間数量限定でエサやり体験を実施し好評でした。そこで、飼育員が立ち会わなくとも安全が確保できるシェルターのような施設をつくれれば、もっと多くのお客さまがゾウへのエサやりを楽しめるだろうと考えました。ゾウは体も大きく力の強い動物です。そのゾウがエサを取れるまで近づけるが壊されないような安全な施設をつくらなければなりません。ゾウとの距離をどうするか?どのような素材を使えば良いか?園内協議、実地検証を重ねました。その結果、ゾウとの距離は2.3mとしました。ゾウは鼻先でしか触ることはできず、強い力をかけることはできません。ゾウと接する部分の素材はポリカーボネートに決定しました。ポリカーボネートはガラスの200倍の強度があり、ゾウの鼻でたたかれても割れることはありません。設置場所はプール横のモート上部と決まりました。7月に完成し、8月から運用を開始しました。お客さまは販売機からエサを購入し、直径4cmの穴からゾウへエサを与えます。運用前はゾウがエサを要求し施設をたたくのではないかとお客さまが怖がってエサやりできないのではないかと不安がありました。しかし、ゾウは鼻先でエサを探すのみで施設への攻撃もありませんでした。小さい子どもでも怖がることなくエサやりできています。「こんなに近くでエサをやるなんてすごい!」というお客さまの声も聞かれました。今後は、この施設を活かし、今まで以上にゾウの魅力を伝えられるようなサービスが展開できればと考えています。



挑戦

特集2

Challenge!

キリンのための飼育管理 エンリッチメント大賞2013受賞

豊かに
する

飼育展示担当 柴田 典弘

昨年、本園のキリンの飼育管理が、エンリッチメント大賞2013を受賞しました。飼育下での様々な問題解決のために選択したいくつかの手法を評価されたことは、動物の飼育に携わる者として大変栄誉なことです。この受賞にはこれまで飼育してきたキリンが大きく関わっています。

私は2011年4月、9年ぶりにキリン担当に復帰しました。以前最後に担当していた個体は物語にもなった「義足のキリンたいよう」。当時は、怪我をしたたいようの前に何もできない歯がゆさに震える毎日でしたが、このことがキリンの飼育のあり方について考え始めるきっかけとなりました。「何もできない」ではなく、人との絆を深め、事故を限りなくゼロに近づける努力を惜しまないこと。さらには「ゾウと同等の健康管理の必要性」を強く感じ、以下のことを実践しました。「可能な限りストレスを与えない飼育管理」、本来の主食である「枝葉を多給する努力」、そして「ハズバンドリー・トレーニング」の導入です。

キリン担当に復帰した時、ジュン(故オス18歳)の前肢は明らかな過長蹄(蹄が伸びすぎた状態)で、少しずつ関節に影響を及ぼしていました。直ちに触ることから始め、順調に馴致は進んでいましたが、残念ながら削蹄することができないままジュンは6月に亡くなってしまいました。ようやく削ることができたのは死して横たわった後。しかし、後悔だけではありません。ジュンは「キリンの蹄が柔らかいこと」を教えてくれ、ヤスリによるケアが可能であると確信しました。また、歯の著しい摩耗も確認され、エサのあり方も深く考えさせられました。ですが死を悲しみ落ち込む暇はありません。過去のキリンたちが今飼育している個体に対しどう接すべきかを示してくれたことで、キリン飼育担当者としてすべきことは「行動」でした。早速蹄のケアについての情報収集をする中で出会った他園の技術者に指導してもらいながら、トレーニングの勉強、手探りでの実践を開始。想定を超えるスピードでトレーニングの成果が現れ、今では飼育しているオス、メスの蹄のケアの他、メスのリンリン(8歳)は定期採血もできるようになり、これまで2年ほど継続しています。



キリンのトレーニング風景

2013年12月7日、東京大学でエンリッチメント大賞の受賞式が行われ、受賞者講演で本園の取り組みを発表しました。授賞式に参加して思いを新たにすることは、これからも前を向いて行動し続けることの必要性。全ては動物たちのために、全力で取り組み続けることをお約束します。

※ハズバンドリー・トレーニング 動物自らが、採血・検温・蹄の手入れ等、健康管理に必要な動作をとるようにするためのトレーニング。

Challenge!

ツキノワグマの冬眠研究 冬眠時のクマの 体温を探る

解き
明かす

飼育展示担当 獣医師 川本 朋代

雪に埋もれエサの確保が難しくなる寒い冬、活動を鈍らせて停止することで、最低限のエネルギーで生き残りをかけようとする動物がいます。日本産小動物、コウモリや齧歯類(ネズミの仲間)のヤマメなどは、体温を外気温並みに下げ活動をほぼ完全に停止してしまいます。

秋田の動物園では、クマの冬眠を探ろうとずっと以前からツキノワグマを冬眠させていました。野生と同じように外気温が下がる前に栄養価の高いエサをたくさん食べさせ、雪が降り出し、外気温がぐっと下がる12月中旬頃に寝室にわらを投入し、エサを少しずつ減らしていくと、クマは冬眠に入ります。しかし、大型動物であるクマは冬眠と言っても、完全に活動を停止させる状態まで体温を下げていないようです。「ようです」と表現するのは、はっきり分かっていないからです。

全くエサを食べずに4ヶ月近く冬眠するクマたちの代謝や生理的変化がどうなっているか、これまでほとんど分かっていませんでした。相手は猛獣、簡単に体温を計る方法はこれまでありませんでした。そんなとき、岩手大学(大学院農学研究科動物科学専攻)との共同研究の話が持ち上がり、体温測定モジュールを体内に埋め込み、体温測定を試してみようということになりました。手術で体温計を腹腔内に埋め込み、そこから電波で送られた体温を測定しようというものです。手術は成功し、実際に送られてくるデータを見たとき、体温というデータから動物の体内をのぞいているような思いでした。残念ながら機械のトラブルで手術後20時間までしかデータを得ることができませんでしたが、冬眠のクマを知る新たな挑戦は、ひとまず大きな一歩を踏み出したと言って良いでしょう。



手術の様子



体温測定したクマの「糞」

埋め込んだモジュール